
魔女の初恋

碧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女の初恋

【著者名】

碧

【ZID】

Z3634Q

【作者名】

【あらすじ】

嫌われ者の魔女は王によつて塔に閉じ込められた。
なぜ、私を殺さないの？

魔女の問いに王は答えない。

?

魔女は嫌われ者。

永い寿命を持ち、人を呪う。

魔女は恐ろしい。

機嫌を損ねると相手に災いをもたらす。

魔女は忌まわしい。

魔女はいるだけで不幸を呼び寄せる。

魔女に近付くな。魔女は人とは解り合えない。人とは別の生き物なのだから。

この塔に閉じ込められてどれぐらいの月日が流れたのだろうか？

白い髪に翡翠の瞳を持つ魔女は手元の本を見つめながらそんな取り留めのないことを考えていた。

養い親である魔女を殺され、この国の王に幽閉されたのはまだ、魔女が外見通りの十代の頃の話だ。

泣き叫び、抵抗しても己の腕を掴む王の手を振り払うことができなかつた。

養母の血で濡れたその手は魔女を強引に自分の腕の中へと囲いこんだ。

魔女に抵抗する力はなかつた。人に信じられてこよくなつた忌ま

しい力なんてどの魔女だって持つてはいない。人より永い寿命と人より豊富な薬と毒の知識。あるのはそれだけ。あとは人と全く変わらない。病気もする。剣で斬られれば怪我をし、死んでしまう。王は魔女を連れ、城へと帰り、そして魔女をこの塔へと閉じ込めた。

王は夜^ごと塔に訪れ、魔女の全てを貪り^くしていく。

「お前は俺のものだ」

苦痛でしかない夜を幾つも過^ごした。

呪いのように毎夜囁かれる言葉の意味がわからなかつた。

涙を流すことも憎むことも忘れた頃、王が隣国から妻を娶つた。美しく聰明で慈悲深い家柄も素晴らしい人々から賢王と呼ばれる王に相応しい女性だと誰もが讚え、歓迎した結婚だつたといつ。

王の結婚式の日、魔女はただ窓の外から空を見ていた。

頬を流れた一滴の冷たさだけが表情を無くした彼女の感情を表していた。

結婚後、王の訪れは日に見えて減つた。当たり前だ。素晴らしい伴侶を得たのに魔女に構う理由はない。

魔女は静かに日々を過^ごした。

そして、数ヶ月後王妃の懷妊が伝えられ、一年後には後継ぎとなる王子が生まれた。

王と会う回数は減つていいく。それと同時に伝わってくるのは国王家

族の幸せそうな様子。

王は妻を愛し、子を厳しくも愛情持つて接している。王は生涯愛する女性を見つけたのだ。

「どうして……私を殺してくれなかつたの？」

こんな風に忘れられるのなら……あの時、養母を切り捨てた刃でこの胸を貫いてほしかつた。

「消えてしまいたい」

願うのはそれだけだつた。

月日は流れていく。

塔に閉じ込められた魔女のことなど誰の記憶にも残つていないのである。

魔女は静かに誰も訪れるはずのない扉を見つめ、目を伏せた。

「お前が魔女なのか！」

長い間固く閉ざされていた扉を易々と解き放ち猪のようにな魔女にもとへと飛び込んできたのは赤髪にきらきらと好奇心に輝く柘榴色の瞳を持つ小さな男の子。

有り得ない光景に魔女の手から本が落ちた。

あの日、魔女の前に現れたのは王の第三王子だつた。父親によく似た顔で笑う王子様は何が楽しいのか王が城を留守にするのを見計らつては魔女の元を訪れた。

明るくお喋りな王子がいつの間にやら魔女の話も聞き出していくと

いうパターンを作り出していた。

「魔女……來たぞ……」

「王子……」

悪びれもなく堂々と扉を開けて入ってきた王子に魔女はため息をついた。

そしてもう、何度も目になるかわからない戒めを口にした。

「ここに来てはいけません」

「？なぜだ、父にはばれてないぞ？第一ここは魔女を逃がさないための仕掛けはあるが侵入するのはわりと簡単だぞ」

「王が私を閉じ込めているのは不吉だからです。魔女は不幸の象徴。私と会つていると知られたら王子を悪く言う者も出て来てしまます」

「お前が不幸の象徴？」

頷くと何故か王子は可笑しそうに笑った。

「寿命が永いこと以外は人と変わらないと言つたのはお前自身だぞ。それに父上の珠玉であることが一番の理由だ。災いを側に置いておくほどあの人は愚かではない」

王子の言葉に魔女は顔を伏せた。

この王子は事あるごとに「父上の珠玉」と魔女を称する。有り得ないの。

魔女は打ち捨てられた玩具だ。見向きもせずに玩具箱の底で朽ちていくのを待つだけだ。

王が大事で愛しているのは王妃であり彼女の生んだ子供達だ。

そんな当たり前の事なのに王子は違うという。

何時ものように納得のいかない会話を切り上げ、王子は別の話題に変え、そして帰つていった。

騒々しくも賑やかな王子の訪問は少しづつ魔女の凍てついた心を溶かしていく。

失った表情が淡く現れるようになり、お喋りな王子につられて魔女の口数も増えてきた。

王の田を盗んでいるため来訪自体は少なかつたが魔女は確かに王子との会話を楽しみにしていた。

永い永い幽閉で無くしかけていた感情が暖かな熱となつて魔女の心を温めた。

緩やかに日々は過ぎていいくのだと思った。王に忘れられ、自由を奪われていても、小さな王子がたまに来て、たわいもない話をして彼の成長を見守る。欲を言えば小さな友人が伴侶を得た時にその相手とも友達になりたい。

全てを奪われ、諦めた魔女に芽生えたさやかな・・・さやかな夢。

小さな小さな願いを風に散らされるなんて知らなかつた。

?

運命は絶え間無く動いていく。人の願いなど知らずに容赦なく終焉へと全てを押し流していく。

「魔女！外にでないか？」

いつものように飛び込んできた小さな（最初会った時よりかは背は大きくなつた）友人はとんでもないことを叫んだ。

「・・・・はい？」

いつかの再現のように魔女の手から本が滑り落ちた。

暖かい春の風も木々のざわめきも花の匂いもあまりにも久しぶりに感じた。

どんな手を使つたのか王子は本当に魔女を外へと連れ出してみせた。にこにこと笑う王子に導かれ長い階段を降りる。一段一段ゆっくりと外へ向かう。

先に下りていた王子が塔の重い扉を押し開く。重い音を立てながら鉄製の扉が外に向かつて開いていく。

奇跡のように光が隙間からこぼれ、入り込んだ柔らかな風が魔女の髪をなでた。

ふらりと誘われるよう魔女は開かれた扉を潜つた。硬い石床から

柔らかな大地へと足を踏み出す。

やわらかくこぼれる木漏れ日、柔らかな風が奏でる梢の音。鳥の鳴き声。遠い昔は当たり前だったもの。取り上げられてから初めて知つた。その尊さ。

永い、永い幽閉生活を強いられてから初めて魔女は塔の外に立つていた。

「魔女ー！ ちだー！ ちー！」

ブンブンと手を振る王子に魔女の顔にはつきりと笑みが浮かんだ。

「貴女が魔女殿なのねー！」

庭の片隅で王子に引き合わされたのは金髪に青い瞳のキラキラ笑顔のお姫さま。

なんでも王子の従姉妹で悪戯仲間でもあるのだそうだ。
王子同様に魔女に対する偏見はなく、ただ純粹な興味と好意を浮かべながら魔女をみている。

「王子に聞いてからずーーーーーとお会いしたかったのー！ わたくし、薬学を学んでいて是非、魔女殿のお話を聞きたいと常々切望していましたわー！」

「や、そりですか……」、光栄です」

キラキラと一斤の墨りのない瞳を向けられ魔女はシドロモドロに答えた。

不思議な気持ちで魔女は柔らかな時間を過ごしていた。

庭の片隅で王子と姫が無邪気な笑顔で自分の話を強請つてくる度に魔女の心が温かくなる。

同族である魔女以外から与えられたのは蔑みと恐怖と迫害。なのにこの一人は王族でありながら魔女に對して普通に接する。話をしてくれる。そして魔女の話も笑顔で聞いてくれる。まるでただの友人のような談笑。

……閉じ込められてから誰も与えてくれなかつたから気づかなかつた。

魔女はただ、こんな風に誰かと笑いあいたかつた。ただ、話がしたかつた。望んだのはただ、それだけだつたのだ。

その幸せを子供達が与えてくれた。

自然と魔女の顔が和らぐ。

「「あつ・・・・・」」

それを見た子供達の声が重なる。

柔らかく、幸せを隠さない心からの笑みは見るものを全て惹きつけた。

「魔女いま、笑いましたわ！」

「うんうんーあんな綺麗な笑顔初めて見た！」

「…………え？あの？」

興奮したようにしゃべりだした王子と姫に魔女は困惑したように視線を彷徨わせ、たしなめようとするが興奮しきった子供一人には届かない。

「魔女はとてもとてもお綺麗ですけど笑われると雰囲気が柔らかくなつてますます魅力的ですわ！」

「そんなことは…………」

「いや。魔女は綺麗だよ。でも今の笑顔は羈りがない分さらに綺麗に見えた！」

「だよねーーー」と頷き合い魔女を褒めまくる一人に居た堪れなくなる。

真っ赤になつて俯く魔女だがその恥らつた様子がさらに可憐さを際立たせていることに気づいていない。

「ああ、ここにドレスや化粧道具があれば魔女を飾り立てますのに

ーーー

きつと夢のように綺麗になりますわーと握りこぶしで力説する姫君。もうやめてーと魔女は叫びたいぐらい恥ずかしかったが王子がそれに同意してなにやら企み始めている。ここそことなにやら小声で話しあつたかと思うと姫が猪のように走り出す。ドレスの裾をたくし上げ爆走する姿はとてもじやないが高貴な姫君には見えない。

呆気にとられその背中を見送る魔女の隣で王子がのん気に手を振つ

ていた。

「宝石も髪飾りもないから今はこれでご容赦くださいな！」

行きと同じように爆走して帰ってきた姫の腕の中には色とりどりの花の姿。息を切らせ、頭のあっちこっちに葉っぱをつけながら姫はにこにこ笑いながら可愛らしく黄色い小さな花を魔女の髪にそつと飾った。

「よくお似合いですわ！」

「うんー…とっても綺麗だ！」

満足そうに笑う姫と王子。魔女は恐る恐る髪に手を伸ばし、花に触れる。柔らかな花びらの感触とともに花の香りがした。

「あ、ありがとうございます」

ハニカミながらもお礼を言う魔女に王子たちは笑いかけようとしてそのまま表情を強張らせた。

魔女が異変に首を傾げるよりも早く、彼女の細い手を後ろから伸びた男の無骨な手が掴み、無理やり立たせる。

痛みと衝撃と共に後ろを振り向かれた魔女の瞳が己を捕らえている人物に気づき驚愕に見開かれた。

魔女から全てを奪つたあの日のように己の腕に彼女を閉じ込め、恐ろしいほど冷たい目で見下ろしていたのは……。

「これは、どうしたことだ？」

もう、何年も会っていない、王、だった。
。

? (前書き)

無理矢理表現があります。ご注意ください。

?

王の射殺さんばかりの怒りが掴まれた場所から伝わる。まるで刃のような怒りに魔女も王子たちも何も言えない。和やかな庭に似合わない殺意にも似た怒りの気配に全員飲まれていた。

怒りを宿した冷たい瞳が強張った表情で己を見上げる魔女を一瞥して、そして王はそのまま魔女を引きずる。

痛いぐらいの力で掴まれた腕を振りほどくことができず魔女はただ王に引きずられるように歩くしかない。

外の景色が消え、風が遮断され、蠟燭の光が微かに揺れる薄暗い塔の長い長い石階段を上らされる間王は何も言わない。魔女を振り向くこともせずに険しい顔のままだ、前を睨みつけている。

階段を上りきり、荒々しくドアを開けると王はそのまま魔女をベットに突き飛ばした。

「あやー。」

ベットに倒れこんだ魔女に王が覆いかぶさる。

魔女を見る王の瞳にはひとかけらの感情も感じられず、ただただ魔女を恐怖させた。

何をされるか長年の経験で悟った魔女の顔から血の気が引くのがわかつていたであろうに王は一切の容赦をせず、魔女の白い首筋に顔をうづすめ、服のボタンを外していく。

ぞくりと背筋に走った感覚は恐怖だったのか植えつけられた快樂への予感だったのか。

凍りついた心なら何も感じないはずだった。だけど、氷が溶け掛けていた心は「の身体に伸ばされる王の手に耐え切れなかつた。

「こやつー」

長い間、出でこなかつた拒絕の言葉。震える身体。歪む表情。怯え、恐怖する心。

つかの間の優しさでとけだした心は長い時間をかけて感じないようになっていたものたちをいとも簡単に魔女に取り戻させていた。

魔女の拒绝に王の動きが止まる。ゆっくりと顔を上げ、魔女を見る顔は全ての感情を削ぎ落としたようなに瞳だけは何か、激しい感情を狂おしくほどまでに宿していた。

何もかもを焼き飛べようつたその赤い瞳に不意に焼き飛べられるように幻影を見た。

「お前は俺のものだ

耳元で落とされたのはいつか聞いた言葉。泣き叫び、拒绝し、そしてあきらめた魔女の視界の端に萎れ、折れ曲がった花が見えた。

それはまるで今の「のよつて魔女は静かに涙を流した。

「なぜ・・・・

全てが終わり、無言で離れていく背中に魔女はつづりな瞳のまま問いかけた。

ずっとずっと聞きたかったこと。
それを、問いかけた。

「なぜ、私を殺さないの？」

いらないのなら、殺してほしい。さいなむのなら、苦しめるのなら、
無視しておいて、これからも戯れにこんな扱いをするのなら。

こうして。

魔女の問いかに王は答えない。

だけど。

ベットに横たわる魔女の元に歩み寄るといつも見上げ、死を
請う桜色の唇を静かに口のそれをでふさごだ。

それは今まで『えられていた奪いつくすような口付けではない。祈
るような許しを請うような静かな口付け。

驚いたように皿を見開いた魔女に向むかふ王は静かに魔女の前か
ら姿を消した。

魔女は皿を腕で覆った。そうでなければ無様に扉にすがりつき、叫
びだしそうだった。

「どうして……あんな口付けなどするの……？」

心などくれないの、見せてくれないの。

「えへ、して……」

答えなど返してくれない。いつだつて王は奪つだけ。魔女に何一つくれない。

この心にあるのは苦しく救いのないたつた一つの気持ちだけ。

「どうして、私は貴方を愛してしまったの?」

家族を奪い、身体を奪い、自由を奪つた男に心をえ奪われてしまつた。出逢つた遠いあの日。

あの日からこの心は王を愛していた。

ずっと見ないふり、気づかない振りをして日をそらし続けた気持ちが王のあの口付けでもろくも崩れ去つてしまつた。

憎くて、苦しくてそれでも愛おしい男を想つて魔女はただ、静かに泣くしかなかつた。

? (前書き)

短いですが投稿です。

?

それから更に時が流れた。あの日、魔女が己の心に生まれていた感情を認めたあの日を境に王が彼女の前に現れることがなく、他の誰も入れなくなつた塔の中、魔女は一人生きていた。

気が狂いそうになる。黒てのない憎しみと苦しみと悲しみが胸を満たし、暗い海の中を照らすように燃する気持ちが灯る。相反する感情に折り合ひをつけることもできずにただ、泣くことしかできない。

心を凍りつかせる」とも殺すこともできない魔女は憎くて愛おしい男の姿を思い浮かべながら涙を流した。

耳が痛いほどの静寂。誰も居ない。誰の声も聞こえない。いつそ、狂えたら楽なのに、魔女の心は現実から乖離することを許さなかつた。

死にたいと思つこともあつたが何故だか自らの命を絶つ気になれない。死のうと思えば首を括るなりなんなり方法はあるといつにどうしてだか死ぬ気になれなかつた。

生に意味など見出していないはずなのに死に魅力を感じない。ベットの上でうずくまりながら魔女はじつと開かない扉を見つめる。一日のの大半はこゝやつて開かない扉を見つめ続けている。

翡翠の瞳は翳りを帯び、痩せこけた身体を守るように縮こまつた。

もつ、来ない。

来ないのだ。

あの人は。

王は。

一度と、来ない。逢えない。

憎しみと愛しさが胸を満たす。

もう魔女自身もどうしたいのかわからなかつた。

ただ、逢えないという事実が、この場に王が来ないと云ふことが、ひどく胸を騒がす。

「なぜ、いみじ、ないのよ……」

久しぶりに出した声は擦れ、老婆のようだと思つた。老いは緩やかなはずなのに心は酷く、老いたような気がする。

あの日、遠ざかる背中に縋り付けばこんな想いはしなかつたのだろうか？ それとも聞くことのない扉を力の限り叩き、叫べば王は来るのでだろうか？

煩わしいと私を殺してくれるだろうか？

養母を切り殺した剣で私の胸も切り裂いてくれるのだろうか？

そんなことを考えても魔女は結局なにもできない。時間を巻き戻す術はなく、扉に近づくことすら怖くてできない。

忘れられた存在だということを認識したくなかった。

変化もないただただ己の感情を持て余すだけの日々。その日々が終わりを告げたのは雲ひとつない晴れた日のことだった。

?

その日は雲ひとつない青空が広がっていた。

何も変わらない日々になるはずだつたその日を魔女は、永遠に忘れることはなかつた。

いつものように疲労から崩れるように眠つていた魔女がのろのろと身体を起こした。翡翠の瞳が怯えたように扉を見つめ、そしてそつとため息をついた。

じつと扉を見つめる。あの扉が開けば、魔女は、どこに行くのだ
うか？

「ひらく、はずなんて、ないのに……」

閉じ込められ、忘れられた存在が何を言つてゐるのだろうか。

■ ■ ■

？」

遠くから雄たけびのようなものが聞こえたよつな?

111

氣のせいではなく、ひびきが近づいてくるのは女性の雄たけびとも
のすごい足音。

長い間、静寂しかなかつた塔にそれらはまるで、時が動き出したことを告げるよつに響いた。

「おひる！」

声と共に長い間閉ざされていたはずの扉はあつさつと開いた。そ
う、まるで、最初から鍵など掛かっていなかつたようにあつさつと。
まさか、と思つた。もしかして、扉は最初から…………。

困惑した魔女の元に扉を解き放つた女性は迷いなく近寄つてくる。年の頃は三十半ばだろうか？金色の見事な髪を結い上げ、走つてきたためか頬をばら色に上気させた女性は美しい顔に酷く、焦りを浮かべながら魔女の腕を掴んだ。

「魔女！大変よ！」

「貴女は……？」

「わたしの」とは後でいいの！今はとにかく急いで！」

戸惑つ魔女に女性はその青い瞳に涙を浮かべつつ立たせようとする

18

「あ、あの……！」

弱つた魔女に抗う術はなく容赦なくベットからおひきされてしまつ

た。

「王が……！王が、危篤なの！病氣で、年も年だからもう、もたないだろ？、つて……！」

女性の言葉に、魔女が震えた。

王。

危篤。

病氣。

もう、もたない。

「あつ……」

めまいが、した。理解、出来ないのに身体から力が抜け、へなへなと魔女はその場に座り込んだ。

死ぬ？王が？

心が真っ白になるぐらいの衝撃を受けた。

養母を殺し、自由を奪い、身体を奪い、心まで奪った男が今、死に掛けていると聞かされ、滑稽なほど、何も、考えられなかつた。

魔女の中の王はいつだって絶対者だった。

何者にも侵される事のない威風堂々とした王。

閉じ込められても逢うことがなくとも、彼は存在し続けると思つ

ていた。愚かにも。そう、思い込んでいた。

ああ、でも。そうだ。

魔女は気づいた。

王は人間だ。そして、人間は老いる。出逢ったころは魔女とほぼ年齢の変わらなかつた王だが、もう、彼の孫が生まれてもおかしくはないぐらいの時が流れているのだ。

魔女には老いが遠い、しかし人間である王は老いる確實に。

消えてしまふのだ。魔女の前からあの王は。

扉を見た。ずっとずっと見つめ続けていた扉。今ならわかる。私はあの扉が開くことを望んでいた。来るはずのない人を私は、待ち続けていた。

どれだけ時が流れても王は居てくれる限り、可能性はゼロではないと心のどこかで思つていたから。

人間と魔女は生きる流れが違うといふのに、愚かにもそう、信じた。

「魔女！」

支えてくれる女性の腕にすがりつきながら魔女は立ち上がる。時は最期を刻み始めている。

この恋の、魔女の初恋の終焉に向かつて。

奪い続けられる人生だった。悲觀して怨んで憎んで苦しんでそし

て愛した。

幸せなど、なかつた恋だった。いつだつて胸が痛くなる思い出ばかり。

だけど、それでも、魔女は恋をしたのだ。愛したのだ。

残忍でも、どこか寂しい瞳をした王に魔女は恋をした。

震える足で魔女は一步足を踏み出す。

「魔女……」

「お願いします。私を王の下へと連れて行ってください」

奪われ続けた魔女は初めて王の意思で選んだ。

王と逢つうこと。そして「」の恋の行く末に決着をつけることを、彼女は選んだ。

?

王の命の砂時計が刻一刻と落ちていくのを感じながら魔女は走った。

長い幽閉生活で萎え切った足は震えて、何度も何度も転ぶ、だが、その度に魔女は歯を食いしばって立ち上がり再び走り出した。案内をしてくれている女性も手を貸してくれ、彼女に引っ張られながら魔女はただ、王の下を手摺して走る。

切れる息。震える身体。破れるのではないかと疑うほど心臓の鼓動は速くなっている。

今魔女に、憎しみはない。悲しみも苦しみも、恋した気持ちもない。

あるのはただ、一つ。

王に逢いたい。

その気持ちだけだった。

息の仕方がわからなくなるくらい苦しい。感覚は朦朧でただ、女性と繋いだ手だけが魔女を繋ぎとめている。足を止めることはできなかつた。

早く、早くしないと済んでしまう。あの、魔女に恐怖を抱えた瞳が永久に閉ざされてしまつ。

「魔女！大丈夫！」

走る速度は落とさずに女性がこちらの様子を心配するのと魔女は黙つて頷いた。

「…………答えなくてもいいから聞いて」

「…………？」

切れ切れの息をしながら魔女は前を走る女性の背中を見つめる。女性は前に向きなおすと走りながら静かに口を開いた。

「後悔はしないで」

「え…………？」

「魔女も王も後悔ばかりしていたでしょ？立場とか偏見とか言葉足らずだとか鈍感とかしがらみとかですれ違つて後悔して泣いてばかり…………ちつとも幸せではなかつたはずだわ。王は泣いてないけどいつだって幸せとは程遠い顔していらっしゃった」

もう、時間はないからと泣きそつな声が呴いた。

「これが最期だから。全部のしがらみや誤解なんかを解くのは無理でもせめて、新しい後悔はしないで。わたくしが貴女を王に逢わせるから、どんな邪魔が入つても絶対に逢わせるから、だから、後悔しないで」

優しい、優しすぎる声。繋いだ手が強く握られた。

「わたくしは…………わたくし達はあまりに子供だった。だから、大人に見つかつたら遠ざけられて、魔女に何もできなかつた。貴女

に外を見せてあげたい。そう思つてたつた一回、貴女を連れ出しただけでもう、魔女に逢えなくなつた

その言葉に遠い日にほんの一時だけ出逢つた金髪の少女の姿が蘇る。黄色い可愛らしい花を髪に飾つてくれて屈託のない笑顔を向けてくれた少女と田の前の女性が一致した。

「お、姫、さま…………？」

前を走る女性は確かにあの時の少女の面影を宿していることに魔女は気づいた。

子供が大人になるぐらいの時間が流れたのだと、実感した。

「友達が泣いているのに何も出来なかつた。…………いまさらだと言わても仕方がないかもしない。言い訳はしないわ。でも、もう、貴女に後悔で辛い涙は流させない」

魔女は答える代わりに手を強く握り返した。

景色が変わる。見事に整えられた庭を抜け、建物に入る。すれ違う従者や騎士達が目を見開き、止めようとするがそれら全てを女性は無視して走りぬける。

建物の奥へ奥へと走つていく。背後で何度も追いかけてくる声が響いたが女性が懐から取り出した小さな包みを振り返りもせずに投げつけると例外なく悲鳴に変わり、追つ手は足止めを余儀なくされていた。

そんなことを何度も繰り返し、豪華だが同じような廊下を幾度も走りぬけた先に一際立派な扉とそしてその扉の前に集まる数人の人々の姿を見つけ、女性はようやく足を止めた。

「ついた……

女性の声に魔女はゆっくりと顔を上げる。
翡翠色の瞳が何かを覚悟するように前を見据えた。

?

荒い息をつきながら顔を上げた魔女を嫌悪が混じった視線が迎える。

魔女の特徴である雪のよつよつ白い髪から長年この国に幽閉された魔女のことを連想するのは容易い。

「魔女だ」

ぱつりと誰かが零した言葉が瞬く間にその場に広がっていく。ふわりと湧き上がる敵意に一瞬、魔女の身体が震えるが彼女は歯を食いしばってそれらを真っ向から受け止めた。

「なぜ、魔女がここに」

「王が危篤の時に」

「不吉な」

「まさか王のこの病気は魔女が?」

「そうだ魔女のせいだ」

「魔女がいたから」

「魔女のせいだ」

「魔女の」

「魔女」

マジョガイタカラ

ぶつけられた敵意。言いがかりに近いそれらは王と出会つまで魔女の近くにあつた現実だ。

疫病が流行ることも誰かが遭難しても子供が風邪をこじらせて傍くなつてしまつてもそれらは魔女が起こしたことになされた。

何度、石を投げられただろう。何度、殺されかけただろう。何度、住処を追われ、何度、同胞の断末魔の叫びを聞いただろうか。魔女を人は受け入れてくれない。ただ、排除する。

それが生れ落ちたその瞬間からさらされ続けた魔女の真実。

だけど。

王は。

あの王は。

奪い続けた王だったけど、養母を殺した人だけど、彼は私を殺さなかつた。

利用もしなかつた。

ただ、塔に閉じ込めて誰にも逢わせないようにした。

今、こうやって人間の敵意にさらされて改めて思う。王は他の人間と違つた。

魔女を生かした。

その真意を知りたい、そう、願つた。

あの時、返つてこなかつた答えを、あの口付けの意味を今度こそ。

魔女を排除しようとする人々に女性が庇つよつに前に出かけたがそれを手で留め、魔女自身が前に出る。

「魔女……」

女性が信じられないような目でこちらを見てくるのがわかつたが構わず魔女は扉を守るように立ちふさがる人々と対峙した。おそらくはこの国の重鎮達なのだろつ。国を支え続けた政治家達は己が主君に不吉の塊である魔女を近づけさせまいと魔女をにらみつけた。

きつと王は慕われていたのだろう。こんなにたくさんの人達がきつとここにはいない多くの人がこの王を慕い、その避けよつない死を嘆いでいる。

ゆつくつとゆつくつと全ては終焉へと向かつてゐる。

誰にも逆らえない。

死には誰も、人も、魔女も逆らえない。

『後悔しないで』

だから。

私は。

「王に逢います。そこをどこへください」

そのためにここに来た。

「ふざけるな!!! 魔女が!!!」

「公爵夫人!!! 何故、魔女などをこの場に連れて来たのですか!!!」

!

「誰か!!! 魔女を牢にでも入れておけ!!!」

政治家達の声に遠くから人が集まつてくるのがわかる。だけど魔女は真っ直ぐただ、扉を見つめながら足を動かした。

「動くな!!!」

「汚らわしい魔女が!!! 王の慈悲で生かされておきながらその王に徒なすか!!!」

「どうしてください!!!」

魔女を捕まえようと伸ばされるいくつもの手。それらを睨みつけながら魔女は生まれて初めてと言つていいほど怒気が籠つた声を張り上げていた。

誰もが動きを止めた。男達もその男達を止めようと謎の包みを投げつけようとしていた女性も。

魔法など使つていなければ誰もが動きを止めて、魔女を見た。

怒りに燃える翡翠の瞳で魔女はもう一度言葉をつむぐ。

「どきなさい。私は王に逢わなければいけないのです」

魔女が前に出るのに氣おされるように人々が震える。だが、何人かは踏みとどまり、魔女の行く手を遮る。

「行かせるわけにはいかない」

「……………どいてください」

睨み合ひ間にも魔女の中に焦りが生まれる。間に合わない。このままここで足止めされていたら王は永遠に手の届かないところに行ってしまう。

「お願い、だから……………どいてください！」

心からの懇願に答えたのは、

「通しておあげなさい」

柔らかな女性の声。

扉の前をふさいだ人々の顔が驚愕に歪む。魔女の傍にいた女性が安堵したように微笑んで「遅いわよ。旦那様」と誰かに呟いていた。魔女が振り向く。

そこに居たのは二人の男女。赤い髪の王に良く似た男性はおそらく

くは彼の息子なのだろう。その内の一人に女性が泣きそうな顔で「遅い！」と叱り付けていた。そんな彼女を宥めながら男性は魔女を見て笑う。その笑顔が遠い昔に出逢った小さな友人の面影を見つけて魔女は小さく驚いた。

もう一人の王子が騒ぐ人々を鎮め、女性が前に進み出る。春の陽だまりのような笑顔を浮かべ、だけど人を従わせる風格も持ち合わせている初老の女性。それが誰かなんて言われなくともわかつた。

王子一人を引き連れてこの場を鎮めることができる人物なんてそうはない。

「王妃、さま？」

魔女に王の伴侶たる女性は悲しそうに微笑んだ。

?

王が結婚したと聞いたときからずっと思っていた。彼が伴侶に選んだのはどんな女性なのだろうか。

そして己の存在をどう、思っているのか。

一人は王の伴侶として子をもうけ、王妃としても国に貢献力を發揮した賢妃。一人は人とは違う長き寿命を持つ忌まわしき魔女と呼ばれ、長きに渡り幽閉されつづけた女。

立場は違えど同じ男と長きにわたり関わり続けた二人の女性は王の死の境にして顔を合わすことになった。

怨まれて当たり前の立場である魔女を見る王妃の目は優しくそして悲しげだ。

「王妃、さま」

魔女の掠れた声に寂しげな笑みを浮かべた女性は未だに扉の前に立ちふさがる臣下に向き直り、一步前にでた。

それはまるで魔女を守るような行為で、そして魔女に対してもそんな行動に出るとは思つてもなかつたため庇われた本人はおろか周囲すら目を見開いた。

気圧されるような威厳は長年王を支え、国を支えた王妃にしか出せないもの。その厳しい視線が魔女ではなく己に向けられていることに臣下たちは戸惑つ。

なぜ、王妃が魔女を庇つような行動をしているのだ?

「そこをどういて魔女殿を中へいれなさい」

「なにを！」

「王妃様！！」

ざわめく臣下を手を上げただけで再び王妃が鎮める。静かにだけど威厳のある声が魔女を王のもとへといざなつ。

「そこを通しなさい。魔女殿に会つことこそ王の最期の願いなのですから」

魔女はただ王妃の背中をみていた。小柄な穏やかな女性に見える。なのにその背中は声は何倍にも大きく強く感じられた。彼女は間違いない王妃。国を支え、王を支え続けた女傑の言葉に誰もが声と動きを奪われた。王妃が静かに扉の前にやつてくる。まるで見ない手に操られるように一人、また一人と彼女に道を譲る。誰も居なくなつた扉の前で王妃は魔女を見た。

「魔女殿。どうか、王にお遭いください。そして、かの人の心を知つてください」

そう言つて頭を下げた王妃。彼女が何を思い、何を魔女に託したのかはわからない。だけど、王妃は確かに王への道を示してくれた。

「ありがとうございます」

他に何も言葉が出なかつた。王の伴侶。閉じ込められ、忘れられた自分とは違ひ王のそばにあり続け、支え続けることができた女性。憎んでもいいはずなのに何故だかそんな気持ちは湧き上がるとはなく、ただ、魔女は静かに一礼をし、そしてさえぎるもの居なくな

つた扉をそつと開いた。

終わりが始まる。

?

その終わりを魔女は「己の鼓動が最後の音を刻むまで忘れる」とは
ないだろう。

ねえ、名前も知らぬ王よ。貴方は名前も知らぬ魔女をどんな思い
で見ていたのだろう。

魔女自身の手で開け放たれた扉が静かに閉まり、外を遮断する。
無駄なものを一切省いた室内。実用性を重視する主の姿があちら
こちらに見受けられる室内で彼は静かに終わりを迎えるとしてい
た。

記憶よりもシワの増えた顔、白いものが混じり始めた髪。病の影
響で痩せた手足、痩けた頬。

そこに眠るのは記憶にあるよつと老いた王。

魔女は知っている。王が青年だった日々を。何者にも屈しない強
さと美しさを秘めた姿。同じ刻を刻んだはずなのに何故、こんなに
も自分達は離れてしまったのだろうか。

変わる王と変われぬ我が身。それを見せつけられた魔女はしばし
立ち尽くします。

この期に及んで終わる貴方の心を知るのが怖いと震える自分を魔
女は苦く嘲笑つた。

「……何時まで馬鹿のように立ち続ける気だ」

掠れ、ひび割れた声にはっと顔を上げれば寝台からこちらを見る

瞳を見つけた。

王は記憶にある通り、感情を読ませない瞳のままこちらをみていた。魔女は一瞬、息をすることすら忘れ、時間を遡った気さえした。

「俺を殺しにきたか」

王は静かにだが確信を持ったように深く息を吐くと、咳いた。殺すなら、殺せ。と言つ王の言葉に魔女は緩く頭を振つて否定した。

「いいえ。それは違います」

「何が違う。お前は俺を怨んでいるのだろう？それだけのことをされたのだから当然だ。だから殺しにきたのだろう？それとも無様に死ぬところでも見物にきたか？」

あざ笑うような言葉が王の口から零れていいく。そのどれもが間違いであり、魔女はただただ頭を振つた。

「違う、違うのです。私がここに来たのは、貴方の元に来たのは

.....

言葉が詰まる。時間がない。この王にこの心全てを伝えるには残された時間はあまりにも、本当にあまりにも少なすぎる。

伝えたいことが多すぎて、知りたいことが多すぎて、なのに時間は手の中からどんどん零れ落ちていく。

魔女は王の枕元に近寄るとそつとそのやせた手を掴む。王が息を呑んだのが伝わったが構わずその手を額につける。

祈るよつこ。

赦しを請つ様に。

王を連れ去りつつする刻に抗つみに強く握り締めた。

繋いだ手から感じる体温にこみ上げる愛おしさが魔女の心を満たした。

「私は…………王、貴方にたくさん、本当にたくさんのことを伝えたくて、また、教えてほしくて貴方に逢いにきました。だけど、全てを知るには時間が余りにも足りな過ぎる」

王は悟っていた己が死期を。魔女も同じ。薬草や医学の知識に長けていた魔女は王の様態を正確に把握していた。

時間がない。

この心をあかし、彼の心を開く時間がない。

王が苦しげに息を吐く。その身を蝕む病はどれほどどの痛みを彼に与えているのだろう。

お願い。もう少し、もう少しだけでいいから私達に時間をください。

伝えたい言葉も知りたい気持ちもたくさん、たくさんある。

だけど、だからこそ、魔女はそつとそれらに蓋をして、たつた一つだけを王からもらおうと思つた。

彼の行動の意味も気持ちもなにも知らない。何も伝えられなくていい。ただ、一つこれだけを彼の口からきけて、そして彼に呼んでもらえればそれだけで、いい。

涙に濡れた瞳でそれでも微笑みながら魔女はそつとその願いを王に告げた。

「名前を、貴方の名前を教えてください」

魔女の想いに握った手が強く握り返された。

扉が開かれ、王のもとへと駆け寄った人々が見たのは驚くほど安らかな死に顔の王と王の手を握り、静かに涙を流す魔女の姿。

誰も、言葉一つ、発しなかった。

それほどまでにその光景は静謐で何者にも画し難いもだった。

老いた賢王を忌まわしい魔女が看取った。それだけですぐさま魔女を王から引き離し、投獄すればいいのにそんな考えすら思い浮かばない。

一目見ればわかる。

魔女は、王を愛していた。

そして、愛していたがゆえに彼女はいま、悲しみ涙を流している。

魔女は静かに手をはずすと王の胸に組ませ、愛おしそうに彼の髪を撫でた。

「わよなう。憎くて愛おしい私の初恋のひと」

「せんせい！」

幼い弟子の声にまどろみの中にいた女性が瞳を開く。覚醒しきれない頭でもたれていた木の幹から身を起こす先生に早足で近づいてきた弟子である少女が腰に手を当て叱り付けてきた。

「また、こんなところで眠つて！風邪をひいてしまつから外で寝はダメだつてなんども言つてくるじゃないですか！」

見事な朱金の髪と青い瞳の弟子によつやく意識が覚醒してきた先生は苦笑いをしつつ地面に落ちていた本を拾い上げた。これではどちらが弟子がわからないですね、などと考へながら。

「すいません。今日は天気が良いのでつい

「ついではあつません！」

「はい。すいません」

くすくす笑いながら謝罪すれば「反省してない」と怒られてしまつた。

弟子と先生は連れ立つて家路につく。

少し歩いたところで足をとめ、先生は夕焼けに染まつていぐ空をつかの間仰ぎ見る。

先生の白い髪が夕焼けに染まり、風に揺れた。

長い、永い夢を見ていた。同胞を殺され、身の自由を奪われた。憎んだ男に心までも奪われた日々。

かつて魔女と呼ばれた女性は己が夢に見た日々よりも永い時間の果てにいた。

辛く苦しい初恋の終わりは自分に終わりをもたらしたと思つた。この先の時間になんの意味など見出せない。

そう、思った魔女は己の間違いをすぐに気づかされた。

成長した友人達、そして王であつた人の伴侶たる王妃の優しさ。その後も続いた人生の中で出会い別れた様々な人々との関わり。気づけば魔女は笑うことができた。幸せだと思つことができた。王がいない悲しさはあっても己の生に意味を見出すことができはじめた。

魔女と呼ばれた、今は先生と呼ばれる女性はふと綺麗に笑う。

「私は幸せですよ」

誰にともつかない言葉を残し先生は少し先で立ち止まって怒つている弟子に向かって歩き出した。

? (後書き)

一応、これで本編は終了です。蛇足的な話を数話書く予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3634q/>

魔女の初恋

2011年8月8日00時21分発行